
Brain Chip - **ブレインチップ** -

うす塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B r a i n C h i p - ブレインチップ -

【Nコード】

N 4 7 2 5 N

【作者名】

うす塩

【あらすじ】

【 2 1 1 6 年 8 月 】

世界は22世紀にして16回目の夏を向えた。

この夏、歴史上最も偉大ともされる発明が生まれる事となる。
すべて物語はここから始まった。

1 - C h i p - 希望（前書き）

この物語はフィクションです。

実在の人物、地名、団体名等とは、一切関係ありません。

1 - C h i p - 希望

【 2 1 1 6 年 8 月 】

世界は22世紀にして16回目の夏を向えた。

この夏、歴史上最も偉大ともされる発明が生まれる事となる。
物語はここから始まった。

「現在目的地上空に到着しました」

「数値は？」

「これといった異常ありません。ただ、」

「ただ？」

「電子数値が少し高いかと」

「なるほど、恐らく電子兵器だろう。念の為データをこっちに送ってくれ」

「了解。送信完了しました」

「やはり電子式^{レーザー}防御システムか。大丈夫だ機体へのは問題ない。だが恐らく通信システムは妨害されて使えないだろう」

「了解」

「潜入を許可する任務を遂行しろ」

「了解」

どの国にも属さず、地図にもない、事実上存在しない島がある。

しかしある重要な任務の為

ノンクライム

【Noncrime】通称【NC】エヌシー

と言われる研究所から特殊部隊がその島へ派遣された。

NC特殊部隊（彼ら）の任務とは・・・

「部隊との連絡が途絶えました」

ここはNC研究所の通信室。

「やっぱり妨害されちゃったかー流石俺の弟ってところか・・・」

彼は しんどうしょういち 新堂正一 この研究所の設立者である。

「正一さんも十分凄いですよ！あの電子防御を突破できる機体マシンを設計するなんて」

そして彼は おおがたまなぶ 大方学 正一 のとても優秀な助手だ。

「あれぐらいは当然。まあ通信が途絶えたのは俺の力不足だ」

「そんな事ないですって・・・」

「そんな事あるの。まあ途絶えた以上こちらでは何も出来ない。後は彼らの無事を祈るだけだ」

「そうですね・・・。そ、そう言えば正一さん！」

「ん？」

「例の件ですが・・・」

「ああ、大丈夫。資料なら完成してるから。後で送っとくよ」

「そうではなく・・・」

「なに？」

「本当にあれを世間に発表する気ですか？」

正一は少し飽きた様子で答えた。

「またそれか。もう決めたことだ」

「・・・」

その返答に黙り込む学。

そんな学に正一はそつと話しかけた。

「確かに、あれは俺一人の力で作った物じゃない。

お前だけじゃなく、この研究所の皆のお陰でもある」

「・・・」

「でもそれだけじゃない。あれは俺のそしてお前の親父達の希望でもあったんだ。

だからこそ、だからこそこれは世間に発表するべきなんだ。親父達

が出来なかったことを

俺達が達成させるんだ。お前の親父もそう望んでるはずだ」

「そう・・・ですね・・・」

「そうだ」

「しかしこれはもし悪用でもされたら大変な事になりますよ・・・」

「悪用はさせない。絶対にだ」

「・・・」

「信じる！」

正一の強い口調に学は大きく溜息をつき、少し悲しい表情を見せた。

「そうですね。今止めた所で会議はもう終わっているし発表も決定した事ですもんね。

それに僕がなんと言ったってどうもなりませんよね・・・」

「学・・・」

「だから僕は正一さんを信じます！これまでそうして来た様に！」

「ありがとう、学」

「いえ！」

学の一番の不安、それは世間の目や経済的な物ではない。

正一の発明で人が傷つくことだ。過去一度正一の発明が悪用され日本そのものが危険にさらされた事があった。

正一はそれを直ちに解決し、日本を救い、英雄となった。が、それと同時に正一に対する不満の声が多くなり、正一を批判する学者まででてきた。

それでも正一が研究を続けられる理由、それは発明だ。今や日本は正一の開発した防御システムによって外からも内からも守られている。

国内での犯罪は激減し、他の国から狙われる事もなくなった。

正一は日本にとっての希望であり、脅威でもあり、

すでに正一は日本に必要不可欠絶対的な存在となっていたのだ。

が、もしそんな彼の発明によって大勢の命が失われたら・・・学は不安でならなかった。それは学にとって正一が国よりも大きな存在だったからだ。

しかし、そんな学がここまで今回の発明の発表を拒んでいたのは今回の発明があまりにも偉大で、脅威的な、歴史上それとない大発明だからだ。

発表を明日に控え。学の不安は肥大していくのであった。

そして翌日、発表は予定通り行われることとなった。

発表は研究所内の完全なセキュリティが完備された施設で行われその様子は研究所にある放送局から全世界に生中継で放送される。

「えー・・・どうも皆さん始めまして、いや、始めましての方は始めまして。

えーその・・・今日はその・・・あの・・・」

「正一さん!」

「・・・わかってる」

正一は人前で喋るのがあまり得意ではない。

「皆さんにも事前にお伝えしたように、ある発明が完成しました。この発明は自分で言うのもなんですが、とても偉大な発明です。実はこの発明は私の父も研究をしていました。しかし皆さんもご存知の通り研究所の事故で父は死に、研究資料を私に託し、この世を去りました」

正一の父の話が出ると会場はざわめき出した。
かれ父もまた偉大な発明家であつたからだ。

「私は父の意志を受け継ぎ、そしてついに成し遂げたのです。あの父ですら成し遂げられなかった事を、この私が！」

会場は静まり返り、じつと正一の次の言葉を待った。

「ブレインチップBrainChip、それが今回の発明です」

2 - C h i p - 発明（前書き）

この物語はフィクションです。

実在の人物、地名、団体名等とは、一切関係ありません。

2 - C h i p - 発 明

「ブレインチップ
B r a i n C h i p、それが今回の発明です」

「B r a i n C h i p・・・？」

「皆さんは見たことも聞いたことも行つた事もない場所の風景を鮮明に思い浮かべる事ができますか？」

正一の発言に会場はまたざわめきだした。

「出来るわけない、不可能だ」

「本来このチップは脳内記憶装置として開発が進められていたもので人間の記憶をこのチップにバックアップする事が目的でした。

しかし今回の発明はそれだけでなく、予めチップに入れておいた情報も

自分の記憶として利用できる、言わば記憶を作ることの出来る装置なんです」

「記憶をつくる・・・？」

「記憶には短期記憶と長期記憶と言う物があり、その違いは情報のありかが脳のどこにあるかなのです。

短期記憶を司る海馬に情報がある段階では、

その知識は短期記憶のままです。ですが海馬にあるその情報を、電気の波が長期記憶を保存する大脳皮質へと移動させられるとその情報は長期記憶となるのです。

そして今回注目したのは電気の波です。

私はその電気の波を人工的に作る実験に成功しました」

会場に来ていた学者達は目を丸くし完全に言葉を失っていました。

正一はここまで常識を覆すことができる人間なのかと驚き、怯える様に見つめました。

「ありとあらゆる情報を脳に入れることが出来る。すばらしいと思いませんか？」

その他にも、独自の最先端技術を駆使したCPUを搭載しているので自分の脳を最新のコンピュータとして作動させることも可能にしました。

これぞ人間の限界を超えた発明なんです！」

会場は一度静まり返り

そして一瞬のうちに歓声と拍手で溢れた。

それから発明の安全性、実用性等詳しい説明が続ぎ、発表が終わったのは開始から約6時間後だった。

そして発表が終わった後、

正一は学に話があると言い研究室に呼び出した。

「お疲れ様です！」

「お疲れ。本当に疲れた」

「話ってなんですか？」

「ああ・・・」

「??？」

正一は完成したチップが入っているカプセルを手に取り溜息をついた。

「確かにこれは完成している。しかしそれはデータ上であって人体実験はまだ行っていない」

「その事でしたら大丈夫です！研究員の中から手配してありますから！」

「その事なんだけど・・・」

「どうしたんですか？」

「俺が自分で試してみようと思うんだ」

正一の発言に学は愕然とした。

確かにそれは正一の性格上十分予測できたことだった。

「絶対駄目です！！リスクが高すぎます！！」

「そう言うと思った。でも決めたことだから」

「なんでいつも一人で決めてしまうんですか！！」

「悪い。だがもし、この実験で研究員が死んだらどうだ？仕方ないで済まされると思っているのか？」

「それは・・・」

「それに俺は自分の発明に誇りを持っている。
だからこそ、自分で完成させたいんだ」

「それなら僕がやります！僕にやらせ下さい！」

「駄目だ。いくら学の頼みでもそれは・・・」

「正一さん！！」

「頼む、わかってくれ。この事はこの研究を受け継いだ時から
決めていたことなんだ。学なら分かってくれるだろう？」

しばらくの間沈黙が続いたが
学はそつと口を開いた。

「わかりました」

「学！！」

「でも、無茶はさせません。オペには僕も参加します」

「もちろんだ！」

こうして人体実験は正一本人が行う事となったが
その事実は政府や研究所の反対を考え
手術に必要な極僅かな人間だけに知らせることとなった。

それから数日経ち手術を3日後に控えた正一はその準備として
研究所内の施設に入院し手術前の検査を繰り返し、

その事は他の研究員達には人間ドックの為の入院と伝えていた。

そんな時、特殊部隊に装備させていた人工知能型探索記録ロボット通称、M V i i l が研究所に記録データを送信してきた。

「遅れてすまない。で、肝心のデータは？」

「いえ、それよりお体の方は大丈夫なんですか？。」

「問題ない。データを」

「はい、こちらです」

「これは・・・」

隊員達の健康状態はすべて情報化されM V i i l へ送られる。

よって彼らの生死はM V i i l から送られてくる情報により把握できる。

しかし電波妨害により今までM V i i l からは一切連絡はなかった。それが今となって送られてきたと言う事は

M V i i l が人工知能を駆使し何らかの方法でデータを送信したか、敵がわざとデータを送らせたのどちらかである。

「部隊が全滅だと・・・」

「データ上ではその様ですね。

しかし、敵がわざとそう言った情報を

送信させた可能性もあるのではないのでしょうか？」

「可能性は捨てきれない。だが、ほぼありえないだろう。

Mviiのセキュリティがこんな数日で破られるとは思えないし、
そこまでして送らせたとしても、あいつにはなんもメリットもない」

「ですね・・・」

「他のデータは？」

「映像も送られてきているみたいです。
もう少しで解析が終わります」

「どれくらいかかりそうだ？」

「少しお待ち下さい」

「早くしてくれ」

「はい・・・解析が終了しました」

「見せてくれ」

「今モニタに映します」

・

・

・

「兄さん、元気？」

モニタに映像が映り、
幼く綺麗な声が通信室に響きわたった・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4725n/>

Brain Chip - ブレインチップ -

2010年10月9日18時55分発行